

<講演> 地域住民によるイタセンパラを支える水管理 ～イタセンパラにとっての名水とは～

氷見市教育委員会事務局教育総務課 主任学芸員・博士（理学） 西尾 正輝 氏

<イタセンパラを追いかけて、大阪から富山に>

西尾氏は大阪府高槻市に生まれ、近畿大学水産学科で淡水魚の研究をし、卒業後大阪で就職した。その後、氷見市でイタセンパラの保護を担当する人を探しているという情報を得、氷見市の職員として富山に移住した。イタセンパラの研究や地域住民とともにその保護活動に取り組んでいる。



1 イタセンパラとは・

- ・コイ科の日本固有の淡水魚、国指定天然記念物、環境省の絶滅危惧種に指定されている。全長8センチの平べったい体形と大きな背びれ、尻びれが特徴的、背中に青みをおびた銀白系の魚。平野部におけるわんど、農業用水路等小規模河川に生息。日本中で濃尾平野・富山平野北西部・琵琶湖淀川水系のたった3か所、それもごく限られた地域にしか住んでいない。富山では氷見市の万尾川と仏生寺川がイタセンパラの住み家である。
- ・イタセンパラの寿命は1年。9月から10月頃にイシガイ科の二枚貝に産卵管を差し込んで産卵し、ほとんど死んでしまう。仔魚は貝の中で冬を越し、翌年5月頃に貝から泳ぎ出てくる。
- ・イタセンパラは環境の変化の大きい場所が好きで、大雨のたびに水があふれて水没したり、雨が降らなくなると浅くなったりする湿地帯が住み家である。川が整備され氾濫しなくなると住めなくなる。
- ・富山県氷見市で見られたイタセンパラは、十二町湯の干拓が進み、二枚貝が急速に減ったため住めなくなり、近くの田んぼの周辺にある万尾川（自然の状態のまま残された農業用水路）へ移動した。



2 イタセンパラにとっての名水とは？

- ・プランクトン（エサ）を多く含んだ水が名水。5～6月（稚魚期）田んぼに川の水を入れてまた川にもどす。そうすると田んぼで増えたプランクトンが万尾川に流れ、イタセンパラのエサになる。
- ・9～10月（産卵期）田んぼに水を使わないので、万尾川の水深が30センチ程になる。この深さになると、サギやブラックバスに食べられないので、イタセンパラは安心して産卵できる。このように米作り（田んぼ）がイタセンパラを支えている。

3 イタセンパラの繁殖や保護への取り組み—地域住民への周知

- ・イタセンパラを守っていくためには・・・生息地の自然を守る（一緒に住むいろんな生き物も守る・ブラックバスの捕獲）とともに一部の個体を飼育することも必要。
- ・ひみラボ水族館（富山大学との協力機関）の活用。無料で入館し、観察・飼育方法や生態について学ぶことができる。
- ・小学5年生の総合学習で飼育し、知ったことを学習発表会で発表して、地域の人に伝える。
- ・地元ケーブルテレビで産卵映像を放映。
- ・イタセンパラを小学校の学習教材として活用。イタセンパラが掲載された写習帖を無料で配って子供や大人に宣伝。

講演を通して、イタセンパラは富山県に生き残った貴重な魚であり、その繁殖や保護に尽力されていることを知り、イタセンパラへの関心が高まりました。「氷見ラボ水族館」にぜひ出かけて、イタセンパラや川の生き物を見てみたいと思いました。

（松岡 記）